

なんか面白いってのは判るけどよ、と斜め上から声がした。火神だ、時間がなかったのか手にコンビニの袋がぶら下がり、口にサンドイッチがある。

「食べながらよりましだと思いますけど」

「いや、あぶねーだろ、お前の場合」

一緒にするなど言いたげだ。残りを口の中に詰めるともぐもぐさせながら紙パックのストローをもぎ取っている。校門に向かつて歩きながら朝食の方が消化も行儀も悪いと黒子は思うが危ないというのは火神の指摘のとおりで、はあとだけ応えた。

「遅くまでテスト勉強でもしてたんですか?」

「アレックスの電話」あいつ時差を判ってねえ。

くあと欠伸をするとストローをコーヒー牛乳に突き刺す。

「あいつ、バスケ以外のこともしてんだな」

「当たり前ですよ」

「翻訳頼まれたんだと。地侍とか言ってた」

火神はお前の話思い出したわ、と続ける。彼の説明で役に立てたのかと思うと同時に、間違った伝え方と解釈をしていなければ異なる文化圏に暮らす彼女にも正しく伝わるはずだと信じもする。

「読んでんの、お堅いのばっかかと思っただけど、お前急に、センゴクブシヨの話センパイに振ったりしたからな」

振ってなどいない、タイミングが悪かったただけだ。部長の趣味と、定

期試験とカントクの采配は合致すると試合以上のスリルを部員に与える。まさかテストに絡んでフィギュアがどうのこうのなんて話が進行していたなど黒子は知らなかった。そして知らぬまま口にしたが最後、部室内の空気は氷結した。なんでもその日の午後の廊下で部長各位はついでのように告げられたらしいのだ。

——今度のテストだけど、全員がクリアしないとそれなりのペナルティを用意するから。

総菜パンの袋を開けながら火神は溜息を吐いた。

「どうしてあぁピンポイントで…締め上げてくれんだよ…」

「日向先輩はコレクションなんて」

捨ててなかつたのかというか懲りないかと誰もが思ったに違いないが彼は趣味を切り捨ててはいなかった。見ていないはずのカントクの眼力は侮れない、伊月のネタ帳は焚書の憂き目に遭うらしい。禁止どころか。

真綿で首を絞めるが如くと言うが、まさにそれだった。二週間後に迫った定期テストは全員が当然赤点クリア、追試回避の命令のみならず、恙無く及第するために下に赤い棒線が引かれた、いわゆる赤ザブの教科を消失させなければならなくなっていた。因みに部員の誰もが何気なくハードルを上げられているので、真ん中をひた走る成績だとしても油断すると後ろからきゅっとやれられてしまう。曰く、夏に向けて底上げしておくから。冗談でないところが怖いのだ。下がるなど論外、誰もが上げる心意気で望んで欲しい、と個人個人でペナルティが異なるのがこれまた舐めてませんけど舐めてスママセンと総員(だったに違いない)の本音だった。

「つか本とか余裕だな…」

「いえ。前に読んだ本ですし、辞書探してたら偶然見付けて」

閉じて振ってみせた、表紙が開ききって綴じの割れ目がはっきりしてしまっているし、最初の数枚には折れあとがくっきり残っている。自家ではなく、物置の段ボールの中にあつたのだ。漢和辞典なんて中学では使わなかつたので別の本を置くために本棚の場所を譲って貰つていて、文庫本はその箱に紛れていた。硬く冷え込んで余裕のないあの頃の自分を思い出して少し気恥すかしくなるが、折れた頁を伸ばし、開いてみる。懐かしい友人に会つたような気分だつた。そしてそのまま読んでしまつている。相手は興味なさそうに目を向けてからストローを啜つた。

「それでコレかよ、マジで危ねえから止める」

「…ああ、火神君レベルだとボク吹っ飛ばされますね」

「お前を避ける機能付きのヤツのが少ねんだよ」

部室までの歩道で伊月の後ろ姿が見える、きつとこの先輩は直前で立ち止まってくれるタイプだろう。意識的に見ない以外は黒子の存在感は勘と慣れた。

「でも、面白かつたんですよ」

背中を見詰めながら言う、伊月は二人に気付くと手を上げて先に部室に入つていった。軽く頭を引くようにしてに会釈を返した火神はへー、とどうでもいいような口調で応えておきながら古いのか、と訊いてくる。

「初めて読んだのは中学の時だつたけど、作品自体は古くはないです」

スピンを挟み込み、鞆の中に仕舞う。

「ふーん」ずずず。

「内容も知っているのにやっぱりまた楽しくて」

だからといってテストという現実から目を反らそうとしていながらも、逃げているわけでもない。

「……」

火神はどこか淡泊な様子だ。

嫌なことは早く過ぎてしまえばいい、きつと誰もが思うことだ。苦手な教科の克服に打つ手が無いのかも知れない。それでも妙なところで割り切りの早かつたりする彼のことだからなるようになれという境地になる。一手手前くらいには追い込まれて…いないとは思うが。

「火神君、練習後の勉強会すっぱかさないでください」

「お前こそ本に夢中になつて忘れましてとか言うなよ」

お互い様だ。牽制し合つてから溜息を吐く、気が重たくなるのはどうしようもない。

「悪あがきのようなものですよ、ボクなんかバニラシェイク取り上げられるんですから」死活問題に等しいです。

「そこで死ぬのかよ」

「死にませんけどダメーじはハンパないのでテスト頑張ります。この本は、一気に読めるつて分かっているから勢いを借ります」

部室内は見えた目いつも通りの朝の静けさとちよつとした眠気とぴんと張られたような寒さが漂っている。どっこいよく見れば問題集が積まれた雑誌の一番上に置きっぱなしにされてたりもしている、窓から差し込んでくる白い日差しにどうにも馴染み難い。

「おはようございます」

「おはよう…っス」

今回赤を喰らうと火神は春まで予定されている練習試合にスタメン出場できない、しかもひと試合ではない、代わりに練習メニューにそのぶんの負荷が加えられるという、このキツさは壊滅的な教科があるという証左でもある。

先に体育館に向かう部員達に手を挙げて返し、ロッカーの扉を開けつ

つ火神は深呼吸するように息を吐く。観念したような顔に見えるが、その前にまずは今日の朝練だろう。

「どしたよ？ 火神」

「腹か？」

「何でもねえ…デスヨ」

「早くコート来いよ、みつちりストレッチやるからな」

「うーす、あ。黒子」

彼らと入れ違いに入ってきた小金井が迷いもせず黒子に視線を向けてきた。

「危ないから本読みながら歩くなつて」水戸部が。

「あ、…ハイ、すみません」

反射的に謝ってしまった。

小金井の後から入ってきた大柄な体躯の向こうに青空が広がっているのが見える。まるで違う季節で場所だつて違うのに、空は同じなんだなと思う。

「……」

置き忘れていた気持ちを拾い上げる。彼は覚えているだろうか。

靴の中に入っている本にはきつと夢中にさせる物語だけではなく、あのときの記憶も綴じられている。色褪せることなく、取り出せない壊れ物みたいに。

中学の時、一度だけの。

心を持っていかれてしまう物語というものはこの世に少なからず存在して、夢中になつて読み耽つて、その読了感ときたら、現実世界の着地もままならず頭がふわふわしてしまう。

ぼうつと空を見上げて気持ちを解き放つ、我慢できなくて昼食を摂ることもそつちのけで貪り読んでしまった。久しぶりだ、とにかく面白かつたど誰かに言いたくてたまらない。そうでなければ物語の相対的なイメージを脳内に再現し、一人脳内映画館の観客として心地よい痺れのないにしばらく漂っていたい。

ふうと吐息が漏れる。

重たい開閉音を聞かせるドアを開けて抜け出た場所は空想世界であるわけでもないけれど煩わしさもなくてちょうどいい。

空は晴れていて、少し湿り気を含んでいる風は身体を抜けると爽快さを残した。下の階の方からはしゃぐ声が聞こえる。校内で一番ではないけれど空に近い場所だ、気紛れだった施設は厳しくなったものの今日は自由に使える。屋上は訪れる人も少なく、女子の四人グループと男子生徒が三人いるだけだった。男子はともかく、女子の方は同級生で、吹奏楽部だつたと思う。ここは穴場ではあるが特別教室棟なうえ、季節によっては上階ゆえの風の強さに弄ばれてしまうことあるので長く居続ける生徒は割に少なかった。黒子を含めたいまのこの人数は多い方だ、とはいえ、気にされないから好きにぼんやりできる。

「…テツヤ？」

「……」

「どっした？」

はつと我に返る。喉の奥がきゅつと狭まり、肩が張つてしまう。

赤司がクリップボードを持って立っていた。委員が何かの用で立ち

寄つたのだろう、背後の女子生徒が中に戻ろうとするグループと測るとか何とか話していた。

「あ、その…」

かちりと焦点が定まる、自分に埋められている装置が稼働し、瞬き一回ふんの間に物語の残滓が消え失せた。

「何でもありません」

頭を振って立ち上がる。感覚は戻っていないけれど、緊張感も持たない。

「居ても構わないよ」

「いえ。邪魔でしょうから」

去るのが賢明と頭の中で何かが告げている。

何がどうというわけではないけれど、赤司が部長になり、監督の交代があつてから、自然にメンバーの誰とも距離を置くようになっていた。

味わつた記憶もないままに半分以上を残した弁当と本を手にドアに足を向けた。男子生徒がじゃれ合うように去っていくのを待つて、足早に赤司の横を通り抜けようとする。

「じゃあ…」

視線すら合わすことも躊躇われた。どうしてだとか何故だとか、目が合つたら最後、彼にとつて無意味ではないことを口にしてしまいそうになるからだ。徐々に赤司との会話も長くなればなるほど息苦しさを覚えてしまうようになっていて、気安く読後の余韻に浸っていたなんて言う気もしない。

「テツヤ」

赤司が呼び止めるのと同時に声を掛けられた。

「赤司くん、ごめん」

刺すように感じられていた視線は少女に向けられる。

「さっきのところにペン落としてきたみたい」探してくる。

見詰められたせいとその声は上擦つて、小さく忙しい足音と共に校内に消えていく。黒子はぼんやりとそれを見送り、非常にいたたまれない状況に陥つてしまったことに気付く。

「……」

残されたのは自分一人だ、手伝つた方がいいのか、それとも立ち去るべきか。

「今日は図書室じゃないんだな」

頷いて応える。

「夢にでも浮かされたような顔だつた」

赤司は表情も動かさないうちま際まで歩いていく、メジャーを取り出すと柵の高さを測り始めた。どうでもいいような冷めた口調が、呆れているようにも責めているようにも聞こえる。

「気付いてたんですか」

気配を消すのを意識したわけではないが、それでも他者の目からは放つておいて欲しくて自分から無視していた。どうあるとも見逃さなはい彼は聡い。

「当たり前だ」

「そんな変な顔をしたつもりはありませんが、丁度、読み終わったものでしたから」

「へえ」

赤司は作業の手を止めずに続ける。制服のネクタイが風にはためいていた。

「面白かつたのかい？」

「ええ、まあ…」とても良かったと素直に言えない。自分が考えていた